

| | |
|--------------|--|
| Title | Sex-specific effects of subjective memory complaints with respect to cognitive impairment or depressive symptoms |
| Author(s) | Tomita, Tetsu |
| Citation | Psychiatry and Clinical Neurosciences, 68(3), 2014, p.176-181 |
| Issue Date | 2014-03 |
| URL | http://hdl.handle.net/10129/5374 |
| Rights | |
| Text version | author |



<http://repository.ul.hirosaki-u.ac.jp/dspace/>

学位請求論文の内容の要旨

| | |
|---|------------------------|
| 論文提出者氏名 | 脳神経科学領域 精神・神経分子科学 富田 哲 |
| <p>Sex-specific effects of subjective memory complaints with respect to cognitive impairment or depressive symptoms (認知機能低下及び抑うつ症状に対しての主観的物忘れの訴えにおける性差)</p> | |
| <p>序論：近年、主観的物忘れの訴え (Subjective memory complains; SMC) についての研究が多くなされており、SMC により将来の認知症発症が予測出来るとされている。加えて、SMC は実際の認知機能低下だけでなく抑うつ症状にも関連すると報告されている。これら認知症やうつ病の罹患率は性別により異なる事が知られている。そこで本研究では、SMC の訴えと性差の関連について調査した。</p> <p>方法：弘前大学医学部における岩木町プロジェクトに参加した 60 歳以上の男女を対象に、物忘れの有無を調査した。男性は 138 名、女性は 256 名を対象とした。物忘れの有無に加えて、Mini-Mental State Examination (MMSE) で認知機能を、Center for Epidemiologic Studies for Depression (CES-D) で抑うつ症状を評価した。多重ロジスティック回帰を用いて MMSE、CES-D、その他の因子の SMC への影響を評価した。</p> <p>結果：男女の平均年齢は、それぞれ 68.8 ± 6.7 歳、68.7 ± 6.1 歳であった。教育年数は、それぞれ 11.1 ± 2.1 年、10.5 ± 1.9 年であった。平均 MMSE スコアは、それぞれ 28.0 ± 2.1、28.6 ± 1.8 であった。平均 CES-D スコアは 10.6 ± 4.6、10.7 ± 5.8 であった。男性群において、女性群に比べ教育年数が有意に長かった。女性群において、男性群に比べ MMSE スコアが有意に高かった。CES-D スコアは男女間で有意な差が見られなかった。男性群では 24 例が、女性群では 72 例が SMC ありと回答した。女性群では有意に SMC 回答者率が高かった。</p> <p>全参加者を対象とした解析において、性別 ($\beta = 0.626$) および CES-D スコア ($\beta = 0.084$) が有意に SMC に関連していた。性別より男女各群に分けた解析では、男性群において、MMSE スコア ($\beta = -0.284$) が有意に SMC に関連していた。女性群において、CES-D スコア ($\beta = 0.106$) が有意に SMC に関連していた。</p> <p>考察：本研究結果から、高齢者の SMC が意味するものが、性別によって異なる可能性が示唆された。本研究は、SMC と臨床症状の関連において、性差を明らかにした初の研究である。男性は客観的に自己の認知機能の低下を捉えた上で SMC を得る傾向があると考えられた。女性は SMC を重篤に捉えて抑うつの的となりやすいか、あるいは抑うつの的となった結果 SMC を得やすいのではないかと考えられた。本研究結果により、SMC が主訴である患者に対して、男性では実際の認知機能低下を、女性についてはうつ病の可能性を念頭に置く事が有益であると考えられた。</p> <p>SMC が意味するものに性差がある理由は不明であるが、性格や気質の差が影響しているのではないかと考えられた。女性群において、MMSE での見当識、注意・計算の下位項目が男性群よりも有意に高かった。これは、地域住民の高齢女性は男性に比べ、日常生活において家事や買い物の際に日時の確認や計算を要する事が多い事が一因と考</p> | |

えられた。先行研究においては、MCI (Mild cognitive impairment) がある患者のうち25%が3年後にはMCIが消失すると報告されている。このことから、本研究におけるSMCが消失した群中には、うつ状態やうつ病が自然寛解した症例も含まれている可能性と考えられた。

本研究における限界点としては、物忘れの自覚があるかどうかのみでSMCの評価を行った事、対象者として地域住民のみを対象とした事、ひとつの地域のみで調査を行った事が考えられた。先行研究においては、SMC scaleという評価尺度を用いたものもあり、今後検討していきたい。また、対象者として患者およびSMCを主訴とした患者を含めた研究により、より有益な研究結果が期待された。

結語：SMCの有無は性別に影響され、男性においては実際の認知機能低下に関連し、女性については抑うつ症状に関連していた。

※1 乙の場合、〇〇領域〇〇教育研究分野にかえて、所属の〇〇講座を記入すること。

※2 論文題目が英文の場合は()内に和訳を付記すること。